

## 令和元年度 hug くむ保育園大岩評価書

### I 経営の重点に関わる事 評価段階 (A:大変良い B:まあまあ良い C:あまり良くない D:全然良くない)

1. 園教育 (卒園目標): 社会に出ていく為の基礎ができた子 保育目標: 「内面的安定」「自立心」「自律心」 育成目標: 「自分の力で気づける子」「自分の考えが持てる子」「行動を繰り返せる子」			
重点目標	評価指標	評価	自己評価
社会に出ていく為の基礎ができた子	保育者との安定した愛着の形成がなされ、年齢に応じた内面的な安定が図られている。	今年度は新入職員も多かった中、保育者と子どもたちとの安定した愛着形成がなされ、内面的な安定も図られていた。まだ、保育理念や目標、方針等の理解が不十分なところもあったので、そこが職員の中に落とし込めていけるようにしていきたい。	B
	保育者との安定した愛着を基盤に、自ら人や物に関心を示し(気づき)探索活動の範囲を広げられる。	さまざまなことに興味関心をもち、探索をしたり、行動範囲を広げたりすることができていた。	A
	自分なりの「～したい」という、自らの考えを持てる。	自分の考えはどの子も持つことができ、自分たちなりの表現方法(動作・言葉等)で保育者に伝えることができていた。	A
	自分なりの考えに基づき、行動し、また行動を繰り返せる。	自分なりの考えをほとんどの子どもが持つことができていた。どのように行動に移せば良いのかわからない子ども達も保育者の一言で行動することができていた。	A
	自分の行動によって生じた結果に対し、自己肯定感(自己有能感)を持つ事ができる。	各ご家庭での様子、園での様子を保護者の方と連携をとりながら共有し、担任を中心に保育者間でどのように保育をしていくのかを考える必要がある。	B
	お友達の気持ちを見通したり、一日の流れを把握し次の行動を見通す事ができる。	2歳児クラスは、4月ではまだまだ“お友だちの気持ち”や“次の行動を見通す”が難しかったが、3月になるとそれが段々とできるようになった。	A
	自分の考えや行動を環境(お友達の気持ち・保育園での流れ)に応じてコントロール(適応)できる。	できていたが保育者の関わり方によって、それができなくなってしまうこともあった。保育者は子ども一人一人の発達状況や個性をよく見て、子どもに関わることをしていきたい。	B

2. 保育方針		
評価指標	評価	自己評価
根拠に基づく保育を実践します。	「根拠」を意識せずに、何気なくできてしまっている職員もいた。そこを意識して日常の保育に活かせるとより良い保育が実践できると感じた。	C
子ども自身の発達状況や個性を尊重します。	子ども一人一人を見て、保育を行う事ができていた。発達状況や個性に関しては、ほとんどの職員がそれぞれの観点から把握していたので、担任を中心にどのように保育をしていくのか共有できると良い。	B
子どもの目線・気持ちに立って子どもの行動を考えます。	ほとんどの職員が子どもの目線・気持ちに立つことができていた。一方で、大人目線で子どもの対応をしてしまい、子どもに寄り添うことができないこともあった。様々な可能性が考えられるようになると良い。	B
子どもの話しや想いを聴いた上で、伝え導いていきます。	この方針に沿って子どもと関わっていることはできた。ただ、それだけで終わってしまい子どもにとっては満足のいく対応ではないこともあったので、この方針の意味をよく理解していく必要があると感じている。	B
「いいところ見つけ」を心がけます。	「いいところ見つけ」がただ単に「いいところを見つける」方針になっていたように感じる。そこからどのように子どもの「いいところ」を伸ばしていくのか、伸ばすことで子どもがどのように成長していけるのかが考えられると良い。	C
やり方を教えるだけでなく、「やってみたい」「学びたい」という意欲も育みます。	活動を進行させることに集中してしまい、子ども達がどうしたら興味を持つか、「やってみよう」と思えるようになるのか考えられると、日々の保育が子どもにとっても保育者にとっても楽しいものになると感じた。	C

## II 施設機能に関わる事

大項目	中項目	評価指標	評価	自己評価
小規模保育施設における保育	発達の連続性を考慮した保育	0歳から3歳までの発達を理解し、子ども発達や実態に合わせて遊びの充実をしている。	2歳児はクラス全体や子ども一人一人に対し、発達に合わせた遊びを展開していた。他の歳児、クラスとも連携を取り合ったり、話し合いを行ったりできるとより良かった。	B
	一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	園児一人一人の生活や経験、発達過程を理解し、安定した穏やかな気持ちで園生活ができるようにスキミングを取り、子どもの想いに寄り添っている。	スキミング、子どもの想いに寄り添う事はほとんどの職員ができていた。それを行うタイミングや、寄り添うところが違う場合もあった為、そのようなときには指導が必要だと感じた。	B
	環境を通して行う保育	子どもの活動がより豊かになるよう考え、遊びの展開に応じて環境の再構成を工夫している。	今年度は2歳児クラス担当職員が率先して自由遊びの時間でも遊びの環境構成の工夫がなされていた。それを見て、徐々にできるようになる職員も増えていったのは良い傾向だと感じる。	A
安全管理・指導	事故防止・防災	様々な状況を想定し、危機管理体制を職員全員で作成し、園児にも安全行動を身につける指導をしている。	防災に関しては例年通りのやり方で行い、職員からも新しいアイデアが出てきて良かった。事故に関しては、他害はあまりなかったが、子ども単独での事故が多くそれに対する対策が乏しかった。今後、様々な状況の想定やインシデントを活用しての対策を考えていきたい。	C
保健管理・指導	健康教育の充実	基本的な生活習慣が自立し、自分の身体に興味関心を持ち過ごす。	保育者の関わり方や、援助の方法の工夫がなされていたため、子ども達の基本的な生活習慣が自立していたように感じた。	A
特別支援教育	支援体制の構築	一人一人の子供を理解し、気になる子に対し支援計画を作成して保育をすると共に、全職員が子どもの関わりに対し共通認識を持ち援助している。	気になる子はいなかったが、子どもによっては支援計画の必要な子もいた。会議内で職員間の共有はできていたが、口頭での話し合いになってしまった為、経過記録に残す等の工夫は必要だと感じた。	C

組織運営	組織体制の充実	園運営（行事・保育・保護者対応など）について職員間で連携を取り合い、保育を進めている。	行事に関しては特に、担当者が一人で計画し準備をしていた。担当者は一人で考えるのではなく、他の職員に頼るようにしていき、担当者以外の職員は担当者を気かけられるような気持ちのゆとりがほしい。	C
研修	研修体制の充実	保育理念・目標・方針に基づき園内研修を行い「社会性の基礎ができた子」の育成を目指し、具体的な手立てや教材研究を行い、実践に生かす努力をしている。	今年度から事例検討が始まった。担当者は自分で事例について様々な方法で臨むことができた為、とても良い機会となった。今後も研修の充実に期待。	B
教育・保育環境の整備	教育・保育環境の充実	子どもが「楽しい」「またやりたい」と感じ、保育者自身も目的を持った環境や教材の工夫をしている	今年度は、朝夕の自由遊びの時間にも環境や教材の工夫をしながら子ども達が遊びを楽しめるよう努めていた。	A
大項目	中項目	評価指標	評価	自己評価
家庭との連携	家庭環境への支援機能の充実	保護者からの意見や要望、相談事を早目に解決できるように、保護者と職員が話し合いの場所をつくり、園からのおたよりを発行している。	保護者からのお話は職員間で報連相ができていたため、早めに解決できることが多かった。個人面談も保護者と1対1で話ができる良い機会となるため、その場も活用できると良い。	A
連携園との連携	連携園との連携の推進	連携園を親しみを持って交流する機会を作っている。	今年度はさくらんぼ広場のみの交流になってしまった。それ以外でも、安東こども園の2歳児クラスさんと交流する機会があると子どもたちが次の集団生活へと移行するのにより良かった。	B
地域との連携	信頼される園づくりの推進	園外保育や地域の多施設と交流したり、近隣住民との触れ合いに努めている。	近隣住民への挨拶はお散歩時に行っていたが、他施設との交流が乏しかった。学校評議委員会等で他園がどのように他施設と関りを持っているのか聞いていきたい。	C

### Ⅲ 園としての保育の総括

今年度は新入職者が多かったということもあり、当園の保育理念・目標・方針が落とし込めている職員もいればまだ落とし込み切れていない職員もいた。「ダメ」「〇〇しないよ」や大人目線で子どもの対応をする姿も見られた。子どもとの向き合い方、寄り添い方を保育の中での経験や研修等で学んでいけると良い。

また、担任も昨年度とは違い歳児毎に担任を置いたため、保護者や園児一人一人に対してより丁寧に向き合うことができていたように感じる。担任だけでなく、パート職員も子どもの事を把握し、担任との共有に努めてくれたため、円滑にクラス運営ができていた。

担任業務については昨年度同様担任にばかり負担が偏ってしまった為、翌日の保育の準備だけでも他の職員に割り振れると多少負担が軽減されたのではないかと考える。

### Ⅳ 園としての経営の総括

新入職者に対して園長・主任間だけでなく、他の職員も協力し合って指導、育成にあてられたのはとても良いことだと感じた。まだまだ、主任から指導されることのほうが多いが、全職員で保育について高め合おうとする姿勢はとても良いことだと感じている。

職員の業務に偏りがあり、特に社員は業務量が多く苦勞している姿が見られた。保育の質を落とさずに業務量をどのように減らしていくかが今後の課題である。

今年度は定員が埋まるのが3月だった為、経営的に非常に厳しい状況だった。園児確保のために園をどのように地域の皆様に知って頂くかその方法を考えていかなければならない。

園児・保護者については、一部保護者からご指摘を頂くことがあった。頂いたご意見・ご指摘について会議などを活用して現場でも話し合いをしていき、健全な運営に活かせるようにしていきたい。